

NEWSLETTER

No.6

鹿児島県JICA派遣専門家連絡会 会報 第6号

(2007年2月)

- 内容 フィジーのスケッチ (汐月卓也)
私のアジアで体験したこと (高間英俊)
高等学校の教科書を垣間見て (志賀美英)
平成18年度会員活動報告 (井口正人, 稲見廣政, 立野敬子, 中畑勝見, 野田伸一, 野呂忠秀, 帖佐理子, 志和地弘信)
平成17年度鹿児島県JICA派遣専門家連絡会総会報告 (馴田義美)
鹿児島県JICA派遣専門家連絡会申し合わせ事項

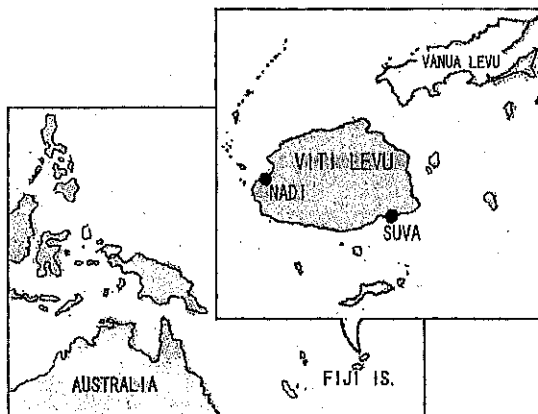
フィジーのスケッチ

元JICA派遣専門家 汐月卓也

私は2005年4月9日から8月6日まで約4ヶ月間、南太平洋のフィジー諸島共和国にJICA短期専門家として滞在しました。水産加工に関する専門家としてフィジーの首都スバ市郊外にある南太平洋連合大学海洋科学研究学部へ単身赴任しました。この大学は60年余前太平洋戦争当時ニュージーランド空軍が使用した跡地に戦後開校された学校が前身で、その後1993年日本政府の援助によって改築されて、現在は一見和風の「校倉造り」様の校舎が完成しています。広大な敷地内には、南方らしくヤシの木やマングローブ、たこの木等の大きな樹々が繁り、美しく刈り取られた芝生に

配置よく花壇等が整備されていて、公園の中に大学があるような美しさです(写真1)。

理学、工学、経済学、IT情報学、芸術学、教育学等の学部はUpper Campusにあり、海辺に近いLower Campusには私が勤務した海洋科学研究学部や法学部等があります。敷地内には学生用、教職員、ゲスト用のロッジが建っています。Lower CampusとUpper Campusは約1.5km離れていますが、構内連絡用の無料の大型バスが20分程の間隔で運行されていて、教職員や学生は自由に利用しています。キャンパスは有刺鉄線やフェンスで囲まれ、その出入口の守衛室には常時複数の守衛



フィジーの所在地



写真1 南太平洋大学芸術学部庭園にて

が待機し、さらに校内安全保安管理のためsafety officerが巡回しています。私はゲスト用ロッジ22号に滞在しましたが、唯一の東洋人、また異色の教職員として安全確保に気を遣ってくれました。

フィジー諸島共和国は大小300余の島々から成る多島国で、その一番大きな東の島(ビチレブ島)の南東部に首都スバ市があります。フィジーの総人口は約88万人、首都の人口16万人、40%強のフィジー人と200年余昔に宗主国英国が砂糖キビ栽培のためインドから植民したインド系フィジー人が約40%弱、その他中国、韓国、ニュージーランド、オーストラリア、カナダ、USA等英連邦の白人系等、種々の民族から成る多民族国家です。大学内にも近隣の島国(キリバス、トンガ、バヌアツ、ツバル、ソロモン、ナウル、サモア、ミクロネシア等)の学生や、英国、ドイツ、オーストラリア、カナダ等の教職員がいて、肌の色も母国語も多様です。共通言語の英語は独特の強い訛があり、馴れるまではしばらく苦労しました。本当に国際色豊かな大学です(写真2)。

私は水産加工に関する技術移転をLecturerのMr. Gablier TITILI(ソロモン人)や、Fisheries officerのMr. Jope LESAVUA(フィジー人)等を対象に行い、またマスターコースの学生たちや国家公務員、水産局の職員(フィジー、キリバス)にもワークショップや講義を担当しました。4ヶ月滞在の間にはいろいろな場面で個人的な交流も深まり、支援業務以外にもフィジーの人達の生活様式や日常習慣等を知ることができました。私と仕事を共にした一人の水産加工実習担当のJope氏(53歳)は、若いころ日本人船長Mr. マツモトが指導する小型漁船で鍛えられた大の"日本人



写真2 海洋研究学部にて、Dr. Zann学部長(左)とDr. Joeli副学部長(右)と

好き人間"で、掃除の仕方、炊飯、漁網の取り扱い、ロープ処理、包丁の研ぎ方まで日本人顔負けのきちっと仕事をする好人物でした(写真3)。彼は生粋のフィジー人で、家庭、家族を愛し、人一倍奥さんを大切にしています。奥さんの具合が悪いときは、病院の付き添いで一日仕事を休みましたし、また魚の処理加工で和風に調理した彼らには珍しい料理を試食用に奥さんのために持ち帰るなどしていました。彼に会うときは、奥さんの具合はどうか?から始まり、毎日の仕事の中で彼の奥さんや家庭の状況が推察されました。

6月の気温が少し下がった日の翌日、彼を通じて奥さんからProf. 卓也は宿舎の毛布は足りているのか?寒ければうちのを持って行ってあげなさい。寝る前にシャワーを浴びる時は熱くして温まったらすぐ寝ないと風邪をひく等々のメッセージがありました。私の帰国時には奥さん手作りの手芸品や伝統的手法で木の皮の布にステンシルしたフィジー独特の土産品など家内宛に持たせてくれました。滞在期間中私は一度も彼の奥さんに会ったことがなく、今もって顔も知りません。

帰国当日の早朝4時30分にJope氏は自宅から30分程をタクシーでやって来て寝室の窓をノックし起こしてくれました。5時に契約のJICA専属のタクシーが迎えに来てJope氏も同乗し、首都スバから200km程離れたナンディー国際空港まで見送ってくれました。荷物の運搬やチェックインの世話をしてくれ、出国までのしばらくの間を空港内喫茶店で最後のティータイムを共にして別れを惜しんでくれました。

また今回の滞在中、ロッジの隣人21号にルームメイト2人で住んでいたTremor TIMCHIN君24



写真3 海洋科学研究学部ティーパーティーにて、カウンターパートのMr. Jope LESAVUAと

歳（当大学経営学修士，南カリフォルニア出身）とJan BODO君22歳（当大学経営学部，独ドレスデン郊外出身の貴族）やその彼女Holly Gittlen嬢，またRebecca L. Lucky嬢（推定20歳台）等皆家族のように仲良くなりました。Jan, Tremor, Takuyaの頭文字を取ってJTT clubと命名し，よく一緒に食事に行ったりお茶を飲んでおしゃべりしたりし，またパーティーを開いて日独米の国際交流もしてきました（写真4）。

南太平洋大学海洋科学研究学部へ着任して最初の全教職員スタッフとミーティングをしたとき，英語で簡単な自己紹介をして鹿大水産学部を1959年に卒業したことを言った直後，大先輩ですね，という言葉が日本語で返って来てびっくりしました。彼女は当大学のLecturerで鹿大水産学専攻昭和61年度修士修了生Mrs. Vina Ram Budesiで，実業家社長のご主人と二人の可愛いお嬢さん（12歳と10歳）のお母さんでもありました。大学での歓迎のロボ（蒸し焼き）料理パーティーや高級住宅地の立派な豪邸のホームパーティーに招待されたり一緒に美味しいインド風レストランへ出かけた



写真4 Jan（独），Takuya（日），Tremor（米）の3人で，JTTクラブ

りと同窓生のありがたさを実感してきました。

スバ市内で有数の水産物加工会社「土佐物産」を経営されている中野徹氏（鹿児島大学水産学部昭和47年卒，昭和48年専攻科修了）には特に水産加工原料魚の入手や漁況の情報その他公私共に大変お世話になりました。フィジーの日本大使館に一等書記官として勤務されている高屋繁樹氏（鹿児島大学水産学部平成元年卒，平成3年大学院修了）令夫人も鹿大理学部卒とか。フィジーで鹿大水産学部同窓諸氏にお会いし，まさに公私共に大変お世話になりました。外国へ出てみると同郷同窓等一層の先輩後輩の繋がりの深さ，ありがたさを実感させられます。

私は今まで5回海外へ出かけて行きましたが，JICAの派遣年齢が70歳までと制限されていますので，これでいったんは幕を引きます。しかし，NPO人材派遣の関係団体に専門家登録をしましたので，体力，気力の続く限りは今後も海外からの派遣要請に応じてまたどこかの国でお役に立つことができると考えています。



写真5 スバ市郊外キウバ村の漁村調査に同行して

私のアジアで体験したこと

鹿児島大学国際戦略本部 高間英俊

鹿児島大学の国際戦略本部（2005年10月設立）に昨年5月に着任しました。よろしくお願ひします。鹿大の前は，バンコクのJICAアジア地域事務所所に居りました。思えば，合計すると海外生活が10年を越すこととなります。バンコクでは，

ASEAN地域全体にかかる技術協力の企画調整をしていました。ここでは，そうした話ではなく，国と国を分ける「国境」についてお話したいと思います。国境とは，私たち日本人にとって非日常的なもので，あまりピンとこないです。その内と

外では、まったく異なる人の運命や国の体制もあれば、似たようなところもあります。前者の例で、最たるものは冷戦下のベルリンでしょう。というわけで、実は、私は国境とはこういうイメージをもっていました。

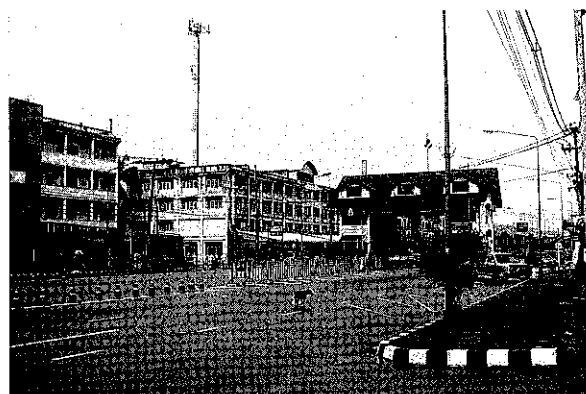
私が最初に国境に接したのは、ヒマラヤ山脈の東側の国ブータンとインドの国境です。南部ブータンで井戸堀をしようということで、調査に行きました。ブータンは平野部がほとんどなく、南部にチョコットあるだけです。そこには、インドとの国境がありました。初めて跨ぐ国境には、塀や有刺鉄線はありません。そこにあったのは、等間隔に並べられた、ただの丸い石です。物理的な国境がないので、人々はそこを自由に往来していました。これでは、ゼンゼン緊張感がないじゃん。

その次は、中央アジアのキルギスとカザフスタンとの国境でしたが、車で国境の入国管理を受けてカザフスタンに向かいました。その周りには、店や家があるわけではなく、ただ非常にフォーマルな国境という印象でした。これも緊張感が薄かったです。

その次2005年6月、私はタイ・ミャンマー国境ミヤワディ（ビルマ側）を訪れました。タイ側のメソッドから友好橋を通り、ミャンマー側の通関を抜けると、ベチャ（三輪車）の運転手がこちらに鋭い眼差しをむけています。よそ者に向けられた冷たい視線、頭上運搬の女性の無言で生気の無い顔。体制の異なる地域から来た者を見る共通した視線と国境の町独特の臭いを感じました。タイ側と比べると狭く、メンテと排水の悪い道路、明らかに異なるインフラの質。そして、分断された双方の町の活気も違います。これが、「国境」の町の緊張感です。両国の政治体制と経済格差が明らかに異なり、そこに、合法にしる非合法にしる、人のフローが片方向に生まれ、異なる価値の物資の流通が双方向に生まれるのです。ミャンマーでは、首都ヤンゴン（当時）での縫製の女工の日当が1ドルですが、この国境の町（タイ側のメソッド）の縫製工場の日当は4ドルです。まして、ミャンマーの地方では雇用機会がそんなにないでしょうから、ミャンマー人がタイ側に押し寄せるわけです。タイのビジネスマンにとっては、これがビジネスチャンスとなって、労働集約産業の誘致が進められるわけです。この国境から中部平野をぬ

けて、さらに東に行くと、メコン川を挟んでタイ・ラオス国境（ムクダハン・サバナケット）があります。それを結ぶ橋が昨年12月に完成しました。さらにラオスを横断してラオス・ベトナム国境をぬけて、ベトナムの南北山脈をトンネルでぬけ、王朝のあったフエ市を通過して港町ダナンに着きます。これで、ミャンマーを除いて、インドシナ3カ国の東西の物流のインフラ（「東西経済回廊」と言います）が完備しました（物流のソフト（税関など）はまだ完全とはいえませんが）。

タイは、次の4カ国と国境を接しています。南部をマレーシア、西部と北部をミャンマー、東部をカンボジアとラオスと。そこには体制の違いを利用したビジネスがあります。それはカジノを中心とする賭博です。タイでは賭博はご法度ですが、隣国のカンボジアとミャンマー国境には、タイ資本が設立したカジノがタイ人用にあります。そのような国境地帯の一部では、カジノと歓楽街を形成しているようです。人生いろいろ、国境いろいろでした。



タイ・ミャンマー国境、タイ側メソット市。中央がタイ出入国管理事務所。



メソットにある縫製工場。ほとんどがミャンマー人女工。右上の看板には、英語、タイ語、ミャンマー語の順で書かれている。

高等学校の教科書を垣間見て

鹿児島大学法文学部 志賀美英

鹿児島大学の共通教育科目に「国際交流のすすめ」という授業がある。この授業は、私がチリのコンセプション大学地球科学科における専門家の任務（任期1985年3月～1986年8月）を終えて帰国して間もなく、鹿児島大学の先生方やJICA九州支部の支部長（笹野暉樹氏、後の初代九州国際センター所長）とともに開設した授業で、平成19年度でちょうど20年になる。最近では講師陣も多彩になり、鹿児島県JICA派遣専門家連絡会の会員にも非常勤講師として授業を担当していただいている。

この授業では毎回、受講生に小レポートの提出を課している。受講生の中には、高等学校で日本のODAの学習をしたことがあるという者が毎年おり、彼らのレポートを通して高等学校におけるODA教育の内容を垣間見ることができる。以下に、私の授業後に提出されたレポートの一部を紹介する。

- ①高校の時の「政治・経済」の授業で、日本はODAの贈与率が世界で一番低く、有償が多いと非難されていると習った。今日の講義で、贈与が必ずしもいいことではないと思うようになった。
- ②高校の時に、日本の援助は資金協力（円借款）ばかりだと教えられた。今日の講義で、日本は日本人技術者を現地に派遣して技術協力もしていることがわかった。
- ③日本のODAは日本の国益を考えている。このことは高校の時から聞いていた。国益を考えた援助は援助とは言えないのではないか。

高等学校では、①、②のような円借款に関する教育がほとんどで、無償の技術協力についてはあまり教えていないようである。また、③のように、「日本のODAは国益を考えている」ことを教える場合は、その拠り所（例えば、日本のODA大綱など）を説明する必要があるが、それがなされているかどうかはレポートからは読みとれない。

そこで私は、現在高等学校で使われている32種の「公民」用教科書（文部科学省検定済教科書高

等学校公民科用の「現代社会」や「政治・経済」について、ODA関連部分の記載内容を調べた。記載内容の一部を以下に紹介する。

- ④後発開発途上国のように工業化の遅れている国で、井戸を掘る場合に、大規模な機械や高度な技術を投入すれば、かんたんに水を供給でき、緊急の必要をみたすことができる。しかし、その方法では、現地の住民の力は活用されないし、機械が故障した場合には修理する部品も技術も手に入らないで、放置されることにもなりかねない（H出版『新版高校現代社会』から原文のまま引用）。
- ⑤わが国の援助は、借款の割合が多く、援助を受け入れる国にとっては制約が多いこと、援助対象地域が、アジアの近隣諸国との協調をはかるという外交の基本方針にそって、アジア地域にかたよっていること、などに特徴がある。しかし、援助対象国でインフラ整備などが進んでいることもたしかである。たいせつなことは、援助を必要としている国に、できるだけ無償で、より実効性のある援助をすることである（S出版『改訂版高等学校現代社会』から原文のまま引用）。
- ⑥「経済大国」となった日本は、ODAも急速に拡大し、総額では1991年以来連続して世界第1位の規模となっている。しかし、対GNP比率は0.3%（1998年度）で、国際的な目標の0.7%には遠く及ばない。そのため日本は、援助額をさらに拡大するよう要請されている。また、日本の援助が特定の地域にかたよってなされたり、受け入れ国の実状にあわず、民衆の生活向上につながっていないという問題も指摘されている（J出版『新訂版政治・経済』から原文のまま引用）。

④の下線部分の記述は、内容が一面的で、日本はモノを提供するだけと誤解されかねない。完全に「技術協力」が無視されている。「このような問題が発生しないように日本は、技術者を現地に派遣し、現地人に対して技術指導を行っている。」

などの記述を追加すべきである。この一文を追加するだけで、日本のODAに対する高校生の認識は落胆から誇りへ逆転するのである。

⑤の下線部分は、教科書執筆者個人の意見である。いろいろな考えの人がいるはずなので、教科書には執筆者自身の考えは入れるべきでない。私は経験から、実現の可能性は別問題として、プロジェクト方式技術協力では、援助受け入れ国の自助努力を引き出すために、完全無償より一部有償のほうがよいと思っている。

⑥では、「国際的な目標に遠く及ばない」のは日本だけと誤解されかねない。「日本の援助が特定の地域にかたよっている」については説明不足であり、その根拠（例えば、日本のODA大綱など）を示せば、納得させることができる。さらに、「(日本の援助は)受け入れ国の実状にあわず、民衆の……」については、失敗例を示すだけで一面的と言わざるを得ない。成功例をあげたり、「日本はこのような問題を解決するために、国別・地域別・分野別援助研究会を設置し、開発途上国各国の現状や課題を研究している。」などの説明を加えるほうが公平である。

高等学校の教科書の分析から次の2つのことが明らかになった。ひとつは、日本のODAに関する記述は、マイナス面が過度に強調され、悲観的な内容が多いこと。教育現場の教員によって適切な補足説明がなされればよいが、マスコミずれした解説が加えられ事実がゆがめられるとなおさら危

険である。高校生にとって初めての学習で受けるインパクトは大きいようで、この時期に事実と異なる知識や誤解を招くような知識が植え付けられると、後まで尾を引くことを受講生のレポートは物語っている。2つ目は、援助額など有償援助に関する記述が多いのに対して、無償援助、特に技術協力に関する記述が少なく、内容に大きな偏りがあること。専門家や青年海外協力隊員など毎年数多くの日本人を現地に派遣し技術協力を行っていることやより実効性のある援助をめざしてさまざまな取り組みを行っていることについてはほとんど触れられていない。調べてはいないが、「文部科学省検定済教科書」とはいても、ODAに直接タッチしたことのない者が執筆し、ODAに直接タッチしたことのない者が検定しているのであろう。

そこで、次の2つを提案したい。

- 1 教科書の記述内容をチェックし、改善すべき点があれば改善を求めていくこと。学者や役人だけに任せず、JICAやJBICなど実際にODAを実施している者が教科書に目を通す機会を設けることが必要である。
- 2 教育現場の教員を対象とした研修会を開催すること。高校生に対して偏りのない教育を行うには、現場の教員にODAの基本と実状を理解してもらう必要がある。研修会の北海道から沖縄までのキャンペーンは、各都道府県のJICA派遣専門家連絡会に委嘱してはどうだろうか。

平成18年度会員活動報告

インドネシア，東部ジャワ，スメル火山およびプロモ火山の噴火活動

京都大学桜島火山観測所 井口正人

1. はじめに

ジャワ島東部に位置するSemeru-Tengger火山群は、インドネシアでも最も頻繁に噴火が発生している場所である。スメル火山は、Semeru-Tengger火山群の南端に聳える標高3676 mの成層火山である。富士山とよく似た美しい円錐形の山体をもち、標高もほぼ同じで、ジャワ島の最高峰でもある。一方のTengger火山は火山群の北部を占める山体で、山頂には直径 8 kmほどのカルデラがあり、いくつかの中央火口丘が存在する。プロモ火山はその1つであり、最も活動的な火山である。筆者は2004年および2005年にこの2つの活火山を訪れ、プロモ火山では目の前で噴火に遭遇した。ここでは最近の両火山の噴火活動について報告する。

2. スメル火山

スメル火山の噴火記録は19世紀前半までしか遡れないが、それ以降でも、ほぼ毎年のように噴火が発生しており、インドネシアを代表する活動的な火山である。噴火の様式としては、山頂のJonggring Seloko火口での小さな溶岩ドームの出現や、ストロンボリ式あるいはブルカノ式噴火(写真1)である。通常は噴火を10分～1時間の間隔で繰り返している。噴煙の高さは1 km程度であり、噴石の大半は山頂火口付近に落下するが、激しいブルカノ式噴火では、噴煙柱が数キロメートルの高さに達し、噴石が数キロメートル以上の遠方に落下することもある。1961年の噴火では、多数の噴石が4 km以上の場所に落下し、山火が発生した。最近でも頻繁に小規模な爆発的な噴火を繰り返しており、2000年7月27日の早朝には、山頂火口付近にいたインドネシア火山調査所の職員2名が、突然の小爆発により放出された火山弾によって死亡した。

また同火山では、山頂火口でのテフラの噴出とともに、馬蹄形火口から舌状に伸びた溶岩流の先端が崩落したり (rock-fall; 写真2)、溶岩ドームが爆発的に破砕された時は、規模の大きな火砕

流が発生する。火砕流の速度は50～150km/hであり、その先端は山頂から15 kmの距離にまで達する。最近では、1994年2月3日の噴火がその代表例である。噴火に至るまでの経緯は次のようである。その噴火以前では、1日に100回前後のストロンボリ式噴火が発生していた。1993年の10月ごろから火山性地震の活動が活発化し、1日に10回以上発生する日もあった。12月に入り火山性地震の震源は火口直下の浅所に移動し、多発するようになった。翌1994年1月24日からは火山性微動が頻発するようになった。振幅は次第に増大し、インドネシア火山調査所(当時)の地震記録は、ほとんど振り切れてしまった。2月3日の3時50分頃に強い爆発音を伴った噴火により火砕流が発生した。火砕流は、南山腹のKembar川と南東斜面のKobakan川に沿って流下し、火口から11.5 kmの距離に達した。その先端付近にあったSumpersari村では、275名の住民の大半が事前に避難していたため、火砕流による死者は4名、負傷者は3名(内2名は後日死亡)だけであった。しかし多くの家屋と150 haの耕地が埋没した。2002年12月にも同様な火砕流が発生した。

また降雨時には、しばしばラハールが発生する。ラハールによる災害は、噴火による直接的な災害よりも広範囲に及ぶ。1909年には、スメル火山の東30kmにあるルマジヤン市までラハールが到達し、220名が犠牲となり、11km²の土地が埋没した。

3. プロモ火山

プロモ山はカルデラ底からの高さが130 mほどであり、火山灰丘の形態をしている。最近では1995年、2000年、2004年に火山灰を放出する噴火があった。噴火は小規模ではあるが、観光客が火口の縁まで立ち入るために、火山噴火予知に対する要請は大きい。

2004年の噴火について詳しく述べる。筆者は2004年6月8日に同火山を訪れる機会を得た。午後3時ごろに火山地質災害防災局(旧インドネシア火山調査所)のプロモ火山観測所に到着した。

プロモ火山は白い噴気を500 mほどの高さまで上げていた。2000年の噴火後に火口から1.5kmほどの距離に設置された地震計は、午後1時ごろから火山性微動を記録していた。午後3時25分ごろからその振幅は徐々に大きくなり、同26分に音響とともに噴煙が立ち昇った。噴煙は瞬く間に1.5~2 kmの高さに達した。噴煙ははじめ黒色であったが、数分後には茶色に変化した。噴石は火口から約1 km離れたヒンドゥー寺院付近まで飛散した。一部の噴石は高温であり、山麓の枯れ木を焼いた。火山灰の放出は約20分続いた。噴石により火口付近にいた観光客のうち、外国人を含む2名が犠牲となり、5名が負傷した。火山地質災害防災局は火山活動のレベルを3 (Siap 警戒) に引き上げ、カルデラ内への立ち入りを直ちに禁止した。また、噴火の状況について地方自治体に説明するとともに、オーストラリア、ダーウィンにあるVolcanic

Ash Advisory Centreに噴火の発生を通報した。このセンターは航空機の安全な運行のために、火山灰の拡散情報を発信している施設である。その後、1-2回の小規模噴火が発生したが、噴煙の放出や火山性微動の発生は次第に減少し、かつ地盤変動にも大きな変化が認められないことから、6月16日に火山活動レベルは2に引き下げられた。

今回の噴火は、噴煙の高度が低く、また噴火の継続時間も短いため、ごく小規模なストロンボリ式噴火であったと考えられる。しかしながら、火口付近に多くの観光客が立ち入る火山では、小規模な噴火といえども極めて危険であり、今回のプロモ火山の噴火はこのことを改めて実証することとなった。わが国の阿蘇・中岳のケースと極めてよく似ている。

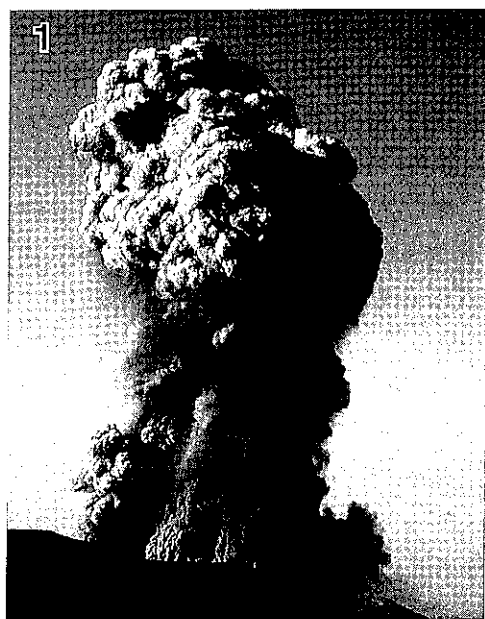


写真1. スメル火山における典型的な山頂爆発。山頂のMahameruから撮影。

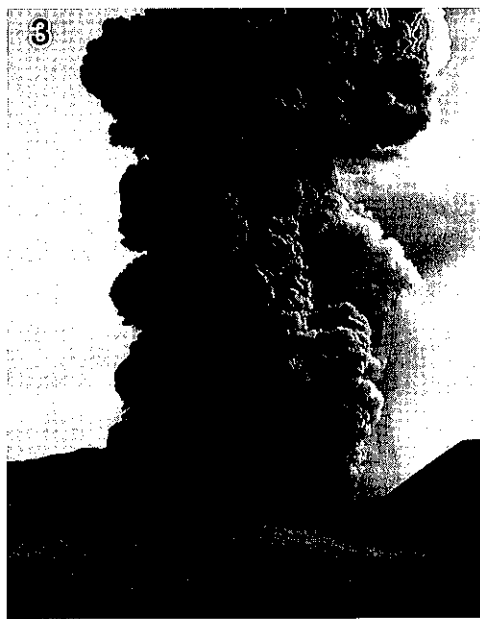


写真3. プロモ火山の2004年6月8日の噴火。噴火発生約5分後。



写真2. スメル火山のrock-fall。山頂から12km東北東に離れたGunung Sawur観測所より撮影。

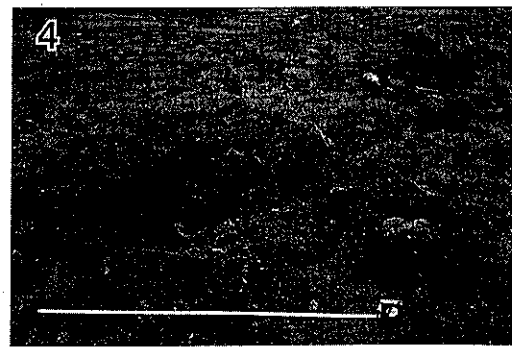


写真4. 火口から約1 kmの距離まで到達した噴石。噴石落下により約50cmの大きさのimpact craterが形成された。

パプアニューギニアから

JICAシニア海外ボランティア 稲見廣政（ゴロカ在住）

パプアニューギニア（PNG）、日本には馴染みが薄い国かと思います。小生は着任する前のPNGの知識といたら極楽島、ラバウル、亀の形をした島・・・こんなものでした。人口500万人、1975年に独立し32年目に入る。

世界地図を広げると日本の真南、赤道を越えたところ、オーストラリア大陸の北に横たわる世界第2の大島、亀の形をしたニューギニア島が確認できる。その東半部及び周辺の大小の島々600からPNGが形成され、面積は日本の1.25倍に相当する。ニューギニア島は3000～4000m級の隆起した高峰が連なり南北を大きく分断する。そのため首都ポートモレスビーと内陸の主要都市と陸路でのつながりがなく、空路移動に頼らざるをえない。

PNGの産業は農林水産業と鉱業の二つが主産業である。農産物、水産物、鉱物そして森林など豊富な天然資源を有し、銅、木材、コブラ、エビ、まぐろなどを日本に輸出している。

PNGは800以上の言語を持ち多種多様な文化、風俗習慣そして伝統的生活様式といろいろな顔を持つ魅力に富んだ国である。

任地ゴロカは東ハイランドの州都で、人口3万人の小さな町である。PNGのほぼ真ん中の山岳地帯、標高1600mに位置し山々に囲まれ緑多く日本の田舎の風景に似ている。気候は年中日本の秋状態が続き寒くなく、暑くなくまた湿度も低く、自然環境に恵まれ生活、活動がしやすく非常に気に

いている。銀行、郵便局、商店街、官公庁、青空マーケット、職場、住宅地などが空港を取り囲み便利のいい街に出来ている。この青空マーケットには新鮮な高原野菜、果物が毎日所狭しと豊富に並び、安く入手出来重宝している。

ゴロカはコーヒーの産地としても名高い。アラビカ・ブルーマウンテンの名を冠し香り高く、高級品として取引される。よく飲用するが香りよく、砂糖、ミルクがなくても美味しくいただける。

ゴロカの近くにアサロ溪谷というところがある。この地の部族は泥の面を被ることで世界的に有名でマッドマンと呼ばれ異様な雰囲気醸す。毎年9月半ばにはいろいろな部族が一同に集まり、原色を使い顔にペインティングをほどこし、奇抜な衣装、独特な踊りと奇声で内外からの見物人を喜ばせる。その中でもマッドマンの勇姿は群を抜く。

一昨年の秋このゴロカに赴き、大学の職業技術訓練教育科でカレッジ、職業訓練校、高等学校の技術系先生を育てるべき専門の自動車のこと、技術に関する数学、応用科学などを担当する。また、家政科から日本食の紹介、作り方の依頼もある。

職場であるゴロカ大学はPNGにある6大学の中で3番目の規模を持ち、そして教員養成機関として最大の大学である。大学の規模は学生数1700名、スタッフが200名で5%が日本人のボランティア、雇われ外国人が占める。

派遣専門家連絡会とJICA九州国際センター

JICA九州国際センター

業務第1チーム

市民参加協力調整員 立野敬子

鹿児島県派遣専門家連絡会会員の皆様へ紙面をお借りして初めて自己紹介させていただくと同時に、最後のご挨拶になります。この2年間九州国際センターにおいて、九州各県の派遣専門家連絡会の幹事の皆様と連絡を取らせていただき、皆様の活動やかかる経費などについて調整をさせていただいておりますが、この3月をもってJICA九州を卒業することになりました。私の本来の業務～草の根技術協力事業～でも鹿児島県を担当させていただき、大学の関係者の方やNGO団体の皆さんと3年間に亘りお付き合いさせていただいております。今や鹿児島県とは切っても切れない縁を感じています。

私自身は長崎県の出身で、南米ボリビア共和国の教育省にて企画調査員として1年間活動したので、長崎県の派遣専門家連絡会総会へ参加したこともあります。また赴任中には、多くの専門家の方々とお知り合いになる機会に恵まれ、特に九州ご出身の専門家の方とは、未だに懇意にお付き合いさせていただいております。皆さんとても个性的で、バイタリティーにあふれた方ばかりです。鹿児島県では限られた専門家経験者の方としかお会いすることがありませんでしたが、どの方も開

発途上国に対する情熱と夢を語ってください、この夢を何とか実現していただくようにサポートするのがJICAの仕事ではないかと確信しております。毎回お話を伺うのが楽しみです。

昨年度よりJICA九州国際センター主催で国際協力事業関係者会議を開催しており、今年度は鹿児島県担当として初めて出席し、司会を勤めさせていただきました。九州の中でも群を抜く結束力のある協力隊OB会や支援する会といったJICA関係団体に加え、今後は派遣専門家連絡会を含めて連携を強化されることを確認しましたので、鹿児島県派遣専門家連絡会がますます鹿児島県の国際交流、国際理解に貢献されるのではと期待しております。また個々の会員の皆様に対して、再度専門家として在外でご活躍を希望される方への情報も差し上げております。詳しくはJICAホームページの『PARTNER』に掲載されていますが、当センターでもお問い合わせ・ご相談に応じております。お気軽にご相談ください。

皆様方とより親しくお付き合いできるように、今後とも取り組んでまいりますのでよろしくお願いいたします。

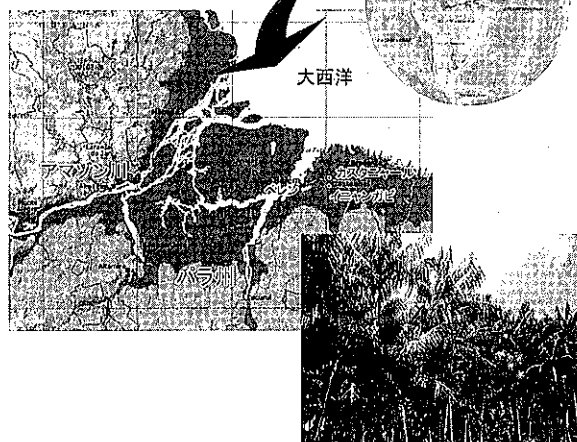
海をわたったワクワクきびなご塾

—アマゾンの子供たちと楽しみ学ぶ—

かごしま水族館 中畑勝見

飛行機が徐々に高度を下げながら旋回し始めると、右手に明るい茶色のレンガを散りばめたような街並みが、そして左手にはミルクティー色をした大きな川が見えてきます。空港に降り立つと、熱帯地域独特の熱い空気が体の芯まで染み込んできて、目が覚めるような、それでいてほっとするような不思議な感覚にとられるこの場所が、今回の舞台となるブラジルのパラ州です。パラ州は世界最大の水量を持つアマゾン川が大西洋に注ぎ込むとき最後に流れる場所で、面積は日本の3.3倍もあります。

活動地域 (ブラジル・パラ州)



地域特産品のアサイ (ACAI)

子供たちの「ワクワク」は私たちの「ワクワク」

水族館が子供たちを対象に、水の生きものを題材にした体験型講座「ワクワクきびなご塾」を始めて5年が経ちました。1講座あたり20~30人の小中学生を対象として、1年間に20近くの講座を開催しています。内容はスタッフがアイデアを出し合って考え、子供たちの反応を確かめながら改良を重ねてきました。その結果、今までにたくさんの「手作り授業」が完成し、さらに新しい「授業」も次々に誕生しています。学校の授業とは一味違う体験ができるとあって各講座には毎回、多数の応募があります。「ドキドキワクワク」から始まって「発見」に至ったときの喜びまで、クルクルと

変わっていく子供たちの表情を見ることは、スタッフにとっても「ワクワク」する時間です。

「ワクワク」をアマゾンへ

かごしま水族館では、独立行政法人国際協力機構とともに「パラ州ベレン市周辺零細漁村におけ



「プランクトンって何だ？」のひとコマ

る持続開発プロジェクト」を実施しています。これはアマゾン河口地域の小さな漁村において、川の資源を有効に利用することによって、地域の発展につなげようというものです。主な目的のひとつは魚の養殖技術を向上させることなのですが、将来にわたって豊かな川の恵みを受けるためには、きれいな「川」と「森」がなくてはなりません。このため漁業者だけでなく、地域に住むたくさんの人たち、特に子供たちにも、川と生きものについてもっと知ってもらいたい、というのがもうひとつの大きな目的です。

今回、私と一緒に仕事をしていただいたのは、パラ州農業技術普及公社に勤務する日系人のオйкаワさんです。パラ州農業技術普及公社は、小さな村で農業や牧畜、漁業などの技術指導を行う機関で、オйкаワさんは主に魚類養殖の指導を担当

しています。彼の目標は、環境に優しい養殖技術を取り入れることによって、将来もずっと豊かな川で生産活動が行われることです。このためには



ワクワクきびなご塾
パンフレット (平成18年度)

漁業者に対する養殖技術の指導だけでなく、子供たちへの教育がとても大切だと考えています。昨年、私がブラジルに持って行った「ワクワクきびなご塾」のパンフレットにとっても関心を持ってくれたことから今回のプロジェクトがスタートしたわけです。

世界共通の「Waku Waku」

かごしま水族館の「ワクワクきびなご塾」が果たしてそのまま通用するのか?・・・プロジェクトが始まるまでは不安でいっぱいでした。しかし考えた末に、歴史や文化が違ってても、海や川と子供たちの関係は、世界中そんなに変わらないだろうし、子供たちが水の生きものについて楽しく学ぶ、という目的が達成できるのであれば、現地の雰囲気にあわせてどんどんやり方を変えればいい・・・そんな半ば開き直りの気持ちでブラジルに入りました。

パラ州農業技術普及公社は、州都のベレンから東へ80km離れたカスタンニャールという町にあります。さらにそこから南へ15kmほど離れたところにあるイニャンガビという町で、今回のプロジェクトがスタートしました。人口は約8,000人。アサイという食用の椰子の実が特産品となっています。町の中心にはイニャンガビ川という小さな川が流れていて、子供だけでなく大人たちも水浴びを楽しむ風景がみられます。

この町の学校の先生たちと相談して、川がすぐそばにあることから「プランクトンって何だ?」の講座をやってみることにしました。先生もプランクトンという言葉は知っていても見たことのある人は一人もいません。もちろん子供たちはプランクトンや顕微鏡といった言葉さえも、全く初めて接するものです。いつも自分たちが泳いでいる川にどんな小さな生きものがあるのか?子供たちはもちろん、私も含めて全員が「ワクワク」しながらプランクトンネットを引き、顕微鏡をのぞき

こみました。顕微鏡の中で、小さな小さな生きものが動いているのを見つけたときの子供たちのうれしそうな顔!たぶん私も同じような顔をしていたと思いますが、自分たちでどんどんプランクトンネットを引き、顕微鏡を奪い合うように覗き込む子供たちをみて「ワクワクきびなご塾」が「Waku Waku Kibinago Juku」になったと思いました。

その後も、日本の鯉のぼりを使って魚の体のつくりを学んでもらったり、紙粘土を使って自分たちの町の川にすむいろいろな生きものを作ってもらったりしましたが、どの講座でも日本の子供たちと同じような「ワクワク」と「発見」の表情をたくさん見せてくれました。同時に、川幅が10mにも満たないようなこの小さなイニャンガビ川にカワイルカの仲間がやって来ることなど、子供たちから教えられることもたくさんあって、私も同じように「ワクワク」する時間を過ごすことができました。

未来の「リーダー」

平成18年8月2日から9月13日までの滞在期間中、イニャンガビ以外でもワクワクきびなご塾を行ないました。この「面白い授業」を他のクラスでもやってみたい、と言う先生が出てきたのはうれしい限りです。オイカワ氏や他のスタッフ、学校の先生たちが、今回と同じような手法でいつでもどこでも水の生きものの不思議を子供たちに教えることができるようになれば、この仕事は大成功だったのではないのでしょうか。これを機会にアマゾン地域独自の「Waku Waku Kibinago Juku」



が作られる日もそう遠くないような気がします。

帰国の日に車で走っていた時です。遠くから子供たちが「ナカハーター！」と声をかけてくれました。将来、今よりさらに豊かになっている川で、漁業に、観光にと、自分たちの村を発展させていく。そんなリーダーが、「ワクワクきびなご塾」に参加した子供たちの中から出てくることを信じています。

このような機会を与えていただいた独立行政法人国際協力機構（JICA）、パラ州農牧技術普及公

社（EMATER）、ブラジル政府、かごしま水族館の皆様にご心から感謝いたします。



立派な魚が完成しました！

ミクロネシア連邦チューク州での学術調査

鹿児島大学多島圏研究センター 野田伸一

ミクロネシア連邦は、太平洋の赤道の北半球側に沿って点在する607の島々（そのうち人が住んでいるのは65島）から成る島国です。総面積は約700 km²で、奄美大島とほぼ同じです。ミクロネシア連邦はチューク、コスラエ、ポンペイ、ヤップの4つの州で構成され、首都はポンペイにあり、各州の大きな島にそれぞれ州都があります。2006年9月に総合学術調査の一員としてチュークを訪れました。チューク環礁は太平洋戦争中に旧日本海軍の最も重要な基地となった経緯があり、日本との関係が深い地域です。

私の主目的はデング熱を媒介する蚊の採集でした。近年地球温暖化に伴って感染症の蔓延が危惧されていますが、その中でもデング熱は患者数の増加、流行地域の拡大、重症型デング出血熱の出現により、世界の熱帯地域の大問題となっています。デングウイルスの主要媒介蚊はヤブカ属のネッタイシマカやヒトスジシマカですが、太平洋地域では地域特有のヤブカ属の蚊によっても媒介されます。ミクロネシア地域においてもしばしばデング熱の流行が起こっており、ミクロネシア連邦に隣接するパラオにおいては1995年1～6月に817名の患者が発生しています。同年5～8月には、ミクロネシア連邦ヤップ島と外島部で数100名のデング熱の患者が発生し、5名の死亡者がでています。また、2004年5月～2005年1月にもミクロネシア連邦ヤップでデング熱の流行があり、

ヤップ島で263名、外島部で395名の患者が発生しました。この流行では、ヤップ島を訪問していた日本人も9名が感染し、帰国後に発症しています。太平洋の島嶼部では気候の影響を受けやすく、このデング熱の流行は台風の来襲直後に起きており、今後、太平洋の島嶼部では気候の変化に伴ってデング熱の流行が頻発することが予想されます。

蚊の採集はチュークの州都があるウエノ島、ピス島およびラマヌム島で行うことができました。現在、蚊の同定を行っていますが、デング熱を媒介するヤブカ類も採集されました。島での蚊の発生状況から、デング熱ウイルスが侵入した場合には流行が起こる状況が備わっていると思われます。ピス島では首長の家、そしてラマヌム島では集会所に宿泊しましたので、島の生活も体験することができました。島での食事はご飯・パンの実・



ミクロネシア連邦チューク州ピス島の子供たち

バナナを餅状にしたもの、それに魚の空揚げなどでした。ミクロネシアの主食はタロイモとパンの実で、これに海からとったおかずが加わるのが伝統的な食生活です。今では安い輸入の米や缶詰が普及し、伝統的な食事は少なくなっているようでした。米はスーパーマーケットでカリホルニア米が80円/kg程度で売られています。インスタントラーメンもポピュラーな食事で、スープがほとん

どないラーメンに魚の缶詰を混ぜた料理も出されました。

最近、教育問題に関心が高まっていますが、最も印象的だったのは伸び伸びとした島の子供たちでした。ヤシの木に並んだ9人の子供たちの写真を見れば、子供たちの生活が想像できるのではないのでしょうか。自分の子供時代にも木登りしたことを思い出しながらシャッターを押しました。

インドネシア水産高校教員研修受入始末記

鹿児島大学水産学部 野呂忠秀

鹿児島大学多島圏研究センター（富永茂人センター長）は、インドネシア文部省職業教育課の要請を受けて水産高校教員31名の研修事業を2006年12月10～23日に実施した。

インドネシア政府は今後5年以内に教育予算を国家予算の2割に増やすことによって国民の教育レベルを大幅にアップさせることを国策としているが、この研修事業はその一貫として、水産高校の教員を日本の大学に派遣したものである。

2週間におよぶ研修では、鹿大水産学部等の教員11名による授業と、多島研センターによるフォーラム「鹿児島大学における南太平洋諸国との教育研究協力」に参加するとともに、鹿児島水産高校（枕崎）、鹿児島県水産技術開発センター

（指宿）、鹿大練習船や東町ステーション（旧水産実験所）、笠沙恵比寿、川内原子力発電所等を見学した。

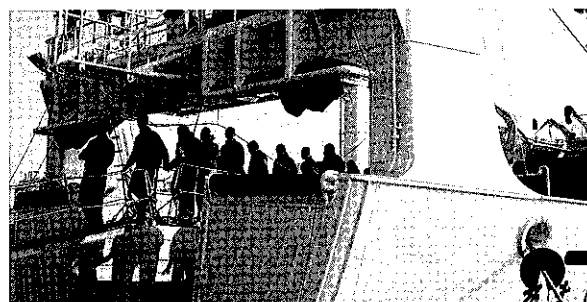
参加者のほとんどは、初めての外国体験であり、その文化や慣習の違いにただただ戸惑う毎日であったが、設備や施設の整った日本の水産高校や、大学の基礎研究が引き金になって百億円産業に発展した長島町のブリ養殖などの成果を目の当たりにするとともに、自国から輸出されているエビやカツオの消費と加工の現場を体験することができた。また、研修の最終日は、長崎のハウステンボスでエキサイティングな一日を過ごして帰国の途についた。



鹿大連合大学院での研修



鹿児島市の回転寿司で初めての経験



練習船かごしま丸の見学



懇親会で地元のガムラン音楽サークルと

平成18年度 近況報告・活動報告および自己紹介

若松記念病院理事長・内科医 帖佐 理子（ちょうさみちこ）

自己紹介

1992年にラオス国へJICA専門家の夫を訪ねたことがきっかけで、ラオス国の医師たちとともに、NGO「ジャット」を立ち上げた。全国約250名の会員の支援をうけ、ラオス国の学校保健援助をしている。

2005年にNPO認証をうける。現在は事務局長。

JICA派遣：ヴェトナム・リプロダクティブヘルス 病院管理

1997年12月12日～1998年1月31日

1998年6月16日～1998年7月6日

1998年12月4日～1998年12月20日

1999年7月6日～1999年7月22日

現職：医療法人大誠会 若松記念病院理事長内科医（糖尿病専門医）

特定非営利活動法人 ジャット事務局長（ラオスの学校保健）

特定非営利活動法人 ピンクリボンかごしま理事長（乳がん早期発見）

平成18年度の活動

1) JICAカウンターパート研修受け入れ「ヴェトナム・リプロダクティブヘルス」

平成18年2月23日(木)

ベトナム国研修員10名受入れ

研修内容；病院概要説明「選ばれる病院とは」

訪問看護ステーション概要説明

病院管理について 他

2) 開発教育

平成18年3月18日 国際ソロプチミスト川内
ジャット活動報告

平成18年4月27日 鹿児島大学法学部

講話 国際交流について

平成18年5月11日 鹿児島大学法学部

講話 国際交流について

平成18年11月18日 鹿児島大学カインズ

講話 国際保健の現場の

声を聞く「なぜ行くのか」

平成18年11月28日 川内国際交流協会

講話 国際理解講座ボラ

ンティア学

「近況・活動報告」

東京農業大学 国際農業開発学科 志和地 弘信

ネパール村落振興森林保全計画に専門家として1994年から1996年まで派遣されて、また、その後、このプロジェクトのサポーターとして1999年までネパールでの農村開発に関わっていましたが、内乱の激化とともにプロジェクトが縮小し、私もすっかりネパールから足が遠のいてしまいました。ネパールの政治はまだ安定には程遠いですが、内乱が終結に向かったことで、安堵しています。今年から、ネパールでの活動を再開する予定です。

さて、昨年は2000年から2004年まで勤務していた国際熱帯農業研究所（International Institute of Tropical Agriculture：IITA, ナイジェリア）と

東京農業大学とで共同研究を開始することになり、大学院生をつれて久しぶりに西アフリカを再訪しました。2年ちょっと経っただけでしたが、ナイジェリアの空港に降り立った瞬間、以前より人々が活気にあふれて、経済が上向いてきているように感じられました。実際、原油高によって国の財政が安定しているのだそうで、ナイジェリアの国内の移動中に道路の修復工事や中断していた橋の建設工事などが見受けられました。このまま順調に推移して欲しいものです。

ナイジェリアではヤムイモやキャッサバの生産性を高める技術開発について、種苗増殖、生産技術の改良、ポストハーベストの一連の研究をやっ



村のチーフと圃場の調査

ています。私は、ナイジェリアでの長期滞在が職務上難しいので、大学院生がそれを担って、研究所に長期滞在しています。当初、共同研究では学生がマラリアなどに罹る危険性も考えられるので、不安ながらのスタートでしたが、現在、国際熱帯農業研究所に研究員として滞在している菊野さん（鹿児島大学連大修士）のサポートもあって順調に進んでいます。

私はというと、教員生活が3年過ぎたところですが、なかなか慣れずに大変です。毎日雑務に忙殺されていると、アフリカが恋しくなっています。

平成17年度「連絡会」総会および講演会報告

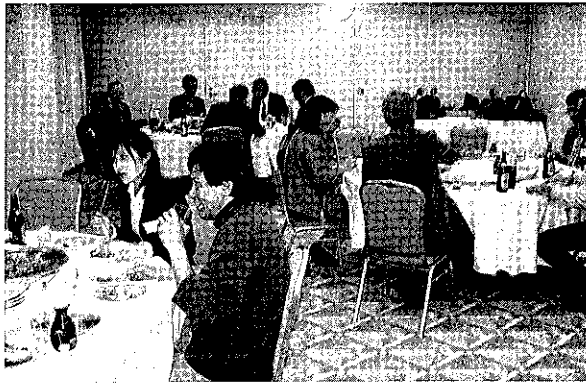
幹事 馴田義美

平成18年3月4日(土)午後4時から、鹿児島市「敬天閣」において、大富幹事司会進行の下、標記総会が開催されました。参加者は会員13名、来賓の講師1名、その他1名の計15名でした。市川会長、笠原JICA九州所長挨拶を受け、議事にはいりました。主な議事は、1) 昨年度の活動報告と2) 本年度の活動方針でしたが、1) については、NEWSLETTERの会員全員配布と会員外の活動に活用すること。会員名簿は、個人情報保護法との関係で住所、電話は伏せていること。会員の経験を活用してもらうための活動（パンフレット配布含む）については、児玉幹事のご尽力により平成17年の8月から12月にかけて県学校教育課、市学校教育課、鹿児島市内の各高校を訪問することができ、主として高校の校長、教頭に趣旨説明できたこと等が報告されました。また、活動方針に

ついては、NEWSLETTERを本年度も継続して発行すること、会員の有資格者は増えていながら新規の会員勧誘が、JICA本部の情報非公開により困難になってきていること等が話し合われました。笠原所長もまじえて、以下、行なわれた議論を列挙します。

- ・現在情報公開法の関係で、一昨年からJICAから名簿の提供がないため新規の資格者への入会案内ができなくなっている。
- ・JICAでは、現状として専門家派遣事前研修で各県に連絡会があるということを「広報」している。またHPでも各県の連絡会についてリンクがある。
- ・元来連絡会はJICAの主導で作られた経過があり、予算もJICAから出ている。しかし現状では活動予算申請しても認められないことがあった





し、JICA自体が、連絡会を育てる意思があるとは思えない。JICAのHPに連絡会の掲載があるにしてもHPがすみからすみまで読まれるとは思えない。

- ・JOCV（協力隊）との横の連絡も必要ではないか。川辺地域のイベントで主体的にJOCVがJICAのPRをしている例もある。
- ・派遣修了後に報告書を提出するが、それを受け取ったという連絡文書を発送するシステムは、現在JICAにはないと思う。もし受け取り文書発送のシステムができれば、各県の連絡会加入申込書を郵送するようにはできないだろうか。今後検討していただきたい。
- ・静岡、愛知、首都圏の中南米からの出稼ぎ子弟に日本語の教科書一式を送り届けている活動を行なっている。今後はそうした組織作りもしようとも考えている。そうした活動をしていることをJICA側も認識していただきたい。また、用紙（半紙）等を元の派遣場所に毎年送り届けることをやっているが、郵便事情が悪くまとまった用紙が盗難にあってしまう。JICAから派遣される方に持って行っていただけるような方策はないか。

また、志賀幹事司会・進行の下、講演「高校教員にとっての総合学習の時間とは」を玉龍高校の地理担当永田聖史氏に行なっていただいた。総合学習の時間に、会員の経験活用活動ができるのではとの期待の元に企画したものであったが、結論から言うと、総合学習が普通高校の進学校では、受験対策の面接や情報収集の方法、小論文対策などの大学受験対策に「活用」されている現状から、カリキュラム上会員の経験活用活動はできないのではとの趣旨であった。ただ、実業系高校なら、自分の元の職場の経験から、充分実施できると思うと発言があった。また公的に外部講師を申請す

る際の手続き的な煩雑さも存在することも指摘された。以下はその要旨である。

- ・玉龍高校の総合学習は、1年間35時間の中で、イギリス修学旅行の事前準備としての調査、6月の文化祭の研究発表準備、3月の課題形式のプレゼンテーションクラスマッチ準備に当てられている。
- ・今の高校生は、小学校時代から総合学習の時間を経験している世代であるが、現場指導の側では依然としてとまどいがあり、市販の業者マニュアルを利用することもある。また、大学進学用の面接や情報収集の方法、小論文対策、進路調査等にも総合学習の時間を利用する。多くの進学校でも同様だと思う。
- ・小中学校の先生と教科を持ち進学・就職の出口の結果を求められる高校の先生とは、置かれている事情がかなり異なるため教員の意識はかなり違う。
- ・講師招聘をする場合、準備として講師の講演実績、専門分野・所属団体などの事前調査などを求められる。実施実績など、招聘側が安心感を得られないとなかなか企画するのは難しい。また講演書類の申請手続きは、非常に煩雑で、実施予定の教室や体育館等の場所確保、時間割調整、謝金も決められていて、この連絡会のような無償（＝不支給）で行なうことは手続き上難しい。むしろ受け取っていただいた方がありがたい。
- ・実際の講演は、話し方とか抑揚なども必要な要素になる。寝そべって聞く高校生もいるので講師の方には失礼に当たることもある。また話しの内容が、事前にわかっているとよいのではないかと思う。失敗できない招聘側の事情も理解していただきたい。

講演をする際、授業として成立するか、時間の



捻出（ロングホームルームなどの活用）ができるかなども問題となる。

- ・高校生は、抽象的な話しより具体的な話しを好む。物語的に話しをすると高校生は聞きやすいのではないか。
- ・職業系の学校では、各科ごとに主体的に職員が動けるので、普通系ほどの困難はない。職業系の総合学習は週2時間から4時間とれる。また国語、英語、社会などの時間を利用することも可能であり、講演を企画しやすいのではないか。
- ・提案として、高校のOBを招聘して実施した経験から、数人の講師がクラスに分かれてワークショップ形式で短時間（30分）行なう方式は、ある程度効果的なのではないかと思う。（＝ワークショップ形式は2時間の時間内で、同じことを複数回行なう方式）

- ・また文化祭行事の一環として企画実施するのはどうか。文化祭の実施では、地域の方々の協力も得られやすい。小規模高でも実施することになっている。そうしたところでは事前に周知されることもあるので、講演の企画はたてやすい。

連絡会として、高校の現状を理解するには貴重な講演であった。今後私達の経験をどのように伝える活動を行なっていくかの宿題は依然として残ったと思われる。

総会后、午後6時過ぎから懇親会が開催され、参加者が少人数だったため、写真のようにテーブルに椅子を用意し、なごやかに会員相互の親睦がはかられました。例年懇親会は、家族同伴を可としていますので、今後ともよろしくお願い致します。

現在の鹿児島県JICA派遣専門家連絡会役員は下記のとおりです。

顧問	笠原秀昭	独立行政法人国際協力機構九州国際センター所長
会長	市川敏弘	鹿児島大学理学部
幹事	馴田義美	川内職業能力開発短期大学校
幹事	児玉憲雄	
幹事	志賀美英	鹿児島大学法文学部
幹事	大富 潤	鹿児島大学水産学部

鹿児島県JICA派遣専門家連絡会申し合わせ事項

(平成15年2月28日)

1. 趣 旨

わが国における開発途上国に対する国際協力活動の一層の拡充要請、九州及び鹿児島県における国際交流活動の活発化、国際協力事業への参加志向の高まりが顕著な今日、開発途上国で国際協力活動の第一線に身を置いた共通体験を有する我々は、持てる知識・エネルギー等を結集して、前記の動向の有効な発展に資すると共に、県内の現居住地において我々の体験を活用する方途の具体化を期して、本会をここに結成する。

2. 事 業

本会は前項の趣旨の具現を図るため、下記に係わる事業を行う。

- (1)政府開発援助（ODA）進展動向に関する調査研究及び提言
- (2)JICA及びJICA九州国際センターの業務遂行の方途に関する助言、支援等
- (3)鹿児島県と海外諸国（特に開発途上国）との国際交流活動の促進、充実に資する諸活動
- (4)会員相互の情報交換・交流・親睦に関すること

3. 会 員

本会の趣旨に賛同するJICA派遣専門家経験者。

なお、今後帰国し、当会に入会を希望する専門家は、当会に入会届を提出するものとする。

4. 会長及び幹事

- (1)会の運営を円滑に行うため、当会に会長1名および世話役として幹事4名を置く。
- (2)会長は会務を総括し、会を代表する。
- (3)幹事は適宜幹事会を開いて、所要の協議・決定を行い、会員の協力を得て、第2項に定める会務の執行に当る。
- (4)会長及び幹事の任期は2年とする。但し、再任は妨げない。
- (5)本会に顧問として、JICA九州国際センター所長の職にあるものを充てる。
- (6)本会に臨時会計役を定め、所定の会計処理をおこなう。

5. その他

この申し合わせ事項を改変、もしくは新たに会則を設ける場合、幹事会が原案を策定し、会員の過半数の同意（集会又は郵送による）を得て施行する。

編集後記

鹿児島県JICA派遣専門家連絡会会報第6号をお届けします。

昨年度から会員の自己紹介、近況報告、活動報告も会報に含めることにしました。また、会報をいろいろな場で役立てていただけるよう印刷部数を300部に増やしました。必要な方はお送りしますのでご連絡ください。

(事務局)

鹿児島県JICA派遣専門家連絡会会報 第6号

発行 2007年2月

発行者 鹿児島県JICA派遣専門家連絡会 会長 市川敏弘

〒890-0065 鹿児島市郡元1-21-35 鹿児島大学理学部

電話：099-285-8170(直通) Fax：099-259-4720

E-mail：ichikawa@sci.kagoshima-u.ac.jp